



まちの工場は、軍需工場になった

のぶ はら

延原倉庫

7号倉庫。木造トラス構造が重厚な雰囲気。

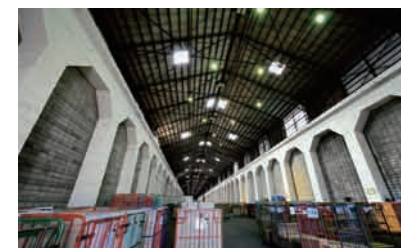
西淡路6丁目の延原倉庫淡路物流センターには、開戦翌年の昭和17(1942)年軍需用に完成した5号・7号倉庫のほか、当時の倉庫が今も配送倉庫として稼働中である。

当時は延原製作所といい、戦前は避雷器や電車通風換気装置などの研究制作を行っていたが、戦争が始まり軍需工場に指定されると、軍艦用蒸

気エンジンや大型ボイラーのほか、石炭を液化して「人造石油」をつくるための反応塔を製造した。大型製品の運搬は船で行われ、工場に隣接する神崎川から船を引き込み、クレーンで積み下ろしをした。しかし最終的には反応塔は輸送中、船もろとも静岡県沖で撃沈されたのだという。空襲の標的になることの多い軍需工場であったが、

この工場は奇跡的に戦火を免れた。

当時の東淀川の主要製造品のひとつだったサラシづくりが灯火管制(P17に解説)用の暗幕製造に変わるなど、産業も戦争を反映したものに变化した。当時成人男性は戦地に送られていたため、主に学生や女性が勤労動員され働いた。学校ごとに勤務先が決められ、授業は行われなくなっていった。



5号倉庫は鉄筋コンクリート造で、全長約280m、幅約20m、高さ約18mの巨大空間。戦時ということで、元々阪神百貨店の建設に使用予定だった鋼材が用いられたという。



人造石油製造用の反応塔。1本65tもあった。
(延原倉庫株提供)

i nterview



竹立威三雄さん(84)

当時の
軍需工場の様子

学徒勤労動員でダイキンへ派遣され、飛行機のラジエーター部品の加工を担当。国のために働くので報酬などない。有毒の塩酸を使うため肺を患ったことも。厳しい職場環境での行き場のない感情を発散させるために、「他校の生徒たちと淀川の河川敷で決闘したもんですわ」という竹立さん。たまに学校に行っても校庭にイモ畑、防空壕が点々とあるだけ。住んでいた浪速区は3月の大阪大空襲で98%が焼け、小学校の名簿も記録もなくなった。教育が受けられないままで学生時代という印象はなかったという。